



## 理性と感性の融合

——美しいダムと水環境づくり——

沢田敏男\*

近代文明は、人びとに賢くなることだけを強要し、知性や理性だけで自然をそして感情さえも征服できると考えさせ、また科学技術の発展は、さまざまなハイテク機器を生み出して実用面で多大の成果をあげながらも、他方人間の全体的な生き方、とりわけ感性面での自己実現を阻むものとなってきている。理性主義が世の中の判断基準となり、感性的なものや感覚・感情と関係のあるものは、理性より劣ったもの、あるいは理性とは関係のないものとしてさえ取り扱われるようになった。人間の生み出すものは、一方では厳密科学の規矩に準じた機能主義の権化と、他方では喜怒哀楽の情念を表現した芸術作品とに分かれてしまった。機能美という言葉の言い出したのは、結局はこの理性主義の破綻を繕うために、もっと感性的なものを、人間のなかにも環境にも、大切にしなければいけないという反省の現われであろう。

そこで、新しい世紀においては、科学技術面の取り組みだけでなく、もっと芸術等の感性的なものを重視し振興しなければならないと考える。いわゆるサイエンス アンド アートの時代をつくることが要請されるであろう。

われわれ水利構造物の計画設計に携わる科学技術者としても、貯水、取水、導水、分水などといった水利施設としての本来具備すべき機能のほかに、景観上も人びとに心地よい感動を与えることのできるような本当に美しい構造物、——つまり理性と感性を融合させたような文化的工作物を創造するよう心掛けることが極めて大切なことである。このようなことが、今後強く要請されてくることであろう。また、人びとが潤いのある真に豊かな生活を実現するための環境づくりに、きれいな水や美しい流れのあることが欠かせないことと思う。文明の進むにつれて、このような水の存在が益々重要になっている。そこで、貯水ダムや溜池、頭首工等の建設でできる水面や岸辺を工夫活用して、親水公園やキャンプ場などを創設し、快適な親水性の空間をつくりだすことが要望されるのである。なお、このようなダムの景観設計や親水空間づくりのための予算が、国の公共事業においても計上できるようになってきたことは評価される。

ところで、本当の“美しさ”という、その語のもともとの意味は、「親が子を、また夫婦が互いに、かわいく思い、情愛を注ぐ心持ちを言う」のである。すなわち、情愛を注ぐ心持ちを人間に生じさせるようなものでなければならない。自然と愛着を覚えるような美しさである。それは自然環境とも調和するものとなろう。言い換えれば、物にそれ自体の客観的な美が宿るだけではなく、見る者、使う者に心地よい感動、居心地良さ、心なごむ温かさを与えるものでなければならない。物と人間が共鳴し、ふれ合うことが要求されるのである。感性に裏打ちされた理性、人の心に訴えるゆるぎやあそびを物や工作物に備えさせる努力が今ほど必要とされる時代はないと考える。人間の感性に訴えるもの、人間への優しさを宿していなければ本当の

\* 日本学術振興会会長（京都大学名誉教授、日本学士院会員）

美しさにはならないと言えよう。作る側が理性と感性とを共に活性化させて、両者が作品の中で融合された形で表現する、それしか本当の美しさを感じさせることはできない。物や工作物と共に「生きる」ということであろう。これこそ美の哲学と申すべきではなからうか。

さて、景観に工夫を施した取水ダム——頭首工として、京都市嵐山の“一の井せき”が挙げられる。渡月橋のすぐ上流に設けられた低い堤高のせきである。ここで取水された水は、洛西用水（数百年の歴史をもつ古い用水である）と呼ばれ桂から向日町を経て長岡京に至る、いわゆる乙訓平野をかんがいする用水で、その一部は桂離宮にも注がれている。せきの所管は京都市で、これが1950年頃改修されることになり、そのせきの構造や修景について検討された。嵐山はよく知られる山水の景勝地であり、また昔から春秋には竜頭の舟を浮かべて王朝絵巻を再現するところで、せき上げてプールされた水面というのは重要な意味をもっている。そこで改修するせきの基本構造は、コンクリートグラビティタイプとするが、なるべく自然岩盤に模するよう工夫することとし、堤体コンクリートの表面に堅硬な黒色の自然石を逆張りすることにした。またせき下流のウォータークッション部や沈床等の工法も工夫して慎重に施された。このようにして改修された一の井せきは、自然景観によくマッチした取水ダムとして機能し今日に至っている。

私の脳裏に残る美しい頭首工として、ドイツ ハイデルベルグのネッカ河に造られた頭首工がある。ハイデルベルグの古城と共にその景観は素晴らしい。また、1963年に完成した木曾川の犬山頭首工は、格別修景に配慮し、創意工夫されており、国宝の犬山城や伊木山を水面に映した景色は、恰も“一幅の絵の如し”と観賞され、広く親しまれている。

つぎに、貯水ダムの景観設計として特筆すべきは、フランスのローズランダム（1961年完成、堤長806m、堤体積94万 $\text{m}^3$ 、貯水量18,700万 $\text{m}^3$ 、洪水流量90 $\text{m}^3/\text{sec}$ 、A・コイン博士の設計）であろう。このダムは、谷の中央部に高さ150mのアーチ部を設け、その両側にバットレスタイプの堤体を配置した複合ダムで、実に美しい。今から32年ほど前、このアーチとバットレスのコンビジットダムを訪れ、その実景を眼前にしたときの感動を今も忘れることはできない。またこの近くの地下発電所を見て感心したことは、発電所のホールに素晴らしい壁画が飾られていたことである。当時ドゴール政権のもと、アンドレ・マンロー文化相らは、芸術、美術を振興することによって、フランス国民の精神を作興するのだということで、ダムや発電所建設のような公共事業においても、施設の修景や環境整備のために投資する施策が行われていることを聴き、感銘を受けたことを思い出す。近時我が国においても、この種ダムの景観設計や水環境等の整備に積極的に取り組むようになってきたことは、よろこばしいことである。

おわりに、私の愛誦する歌を掲げて、この拙文のむすびとしたい。歌の作者は不詳であるが、その昔、京都嵯峨の広沢の池畔で詠まれた尊い方の御歌と思う。

うつるとも 月もおもはず

うつすとも 水もおもはぬ

#### 広沢の池

無心の秘訣を洞徹する歌であるが、この無心の境地に誘ってくれるのも、美しい水を湛えた広沢の池であり、すぐれた水環境であると言える。

以上、美しいダムと水環境づくりについて管見を述べたが、要は人びとの心に、うるおいや豊かな感性を与えることのできるような水利構造物を創造すること、つまり計画設計に携わる者として、理性と感性とを共に活性化させて、それらが作品の中で融合された形で表現できることをもっと工夫してほしい。さらにこのことは、研究面でも積極的に取り組むべきことであろう。